



- ◇ トマトって？ （3歳）
- ◇ まめ、むいてみよう （3歳）
- ◇ このアリはかむねんで （4歳）
- ◇ カメを見ながら （5歳）
- ◇ 自分で決めるということ （5歳）
- ◇ 入ってほしくないから… （5歳）
- ◇ 2本目の大根収穫 （5歳）

自分と違う思いにふれたり
いろいろなやり方を知ったり
違うことに気づいたり
同じがうれしかったり
違うことを楽しんだり
そして自分がわかったり

～幼児期の子ども達は「同じ」と「違う」ことを自由に行き来しながら、様々な自分や他者、出来事などと出会い育っていきます。
モノや、生き物を含む他者との違いを肯定的に捉え、自分も含めた
誰もが大事で、尊重すべき存在だと感じられるように～

3歳児I期7月



ちがい



保育エピソード

トマトって？

「何ができるかな？」から始まる栽培活動を通して



未来につながる教師の学び

子供たちが想像を膨らませ、何が実ののかを楽しみにできるように…と願い、トマトの苗だと知らせず「おいしいものができるんだよ」と言って栽培活動を始めました。子供たちは「チョコレートかな」「おいもかも」と、なっほしいものを嬉しそうに言い合っていました。そして、緑の小さいトマトが実りだすと、それを採って集める子、じっと見る子、気付かず水やりを楽しむ子など様々な姿がありました。教師は「大きくなったらみんなで持って帰ろうね」と話をしていました。

そんなある日、A児が緑のトマトを採って「トマト」と持ってきました。「あ、とっちゃったか」と、顔を見合わせるいつもと違う私たち教師の反応から“いけないことをしてしまった”と思ったA児は泣き出してしまいます。「持って帰る？」と聞きましたが、「もってかえらない！」と泣きながら怒り始めてしまいます。少し離れたところで落ち着いて話をすることにしました。

初めは「いらない、持って帰らない」と言っていたA児でしたが「トマト今緑でしょ。実はね、色が変わってくるんだよ」と言うと、「え？」と顔をあげました。「置いてたら色が変わるかもしれないよ」と話をしていると、次第に「持って帰る」と気持ちを切り替えたようです。その後A児はトマトのプランターまで行き、緑や赤のトマトを指さしながら「トマトさん赤いね、なんで？」「これは緑だ、なんで？」と、しきりに見ていました。

保育エピソード その後

翌日、A児は持ち帰ったトマトを「まだ緑だった」と教えてくれました。保護者から、毎日家で「赤くなあれ、赤くなった？」と観察していたと聞きました。

考察

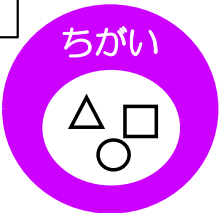
トマトが苗からできること、緑の色が変わっていくということは教師にとって当たり前のことでした。しかし子供たちにとってのトマトとは、“お店で見る、ころころした赤い色のもの”です。今回の栽培活動でトマトの色が変わるという経験をして初めて気が付いたようでした。

また、教師はトマトを食べるものとして捉えているため、子供たちが緑のトマトを採る姿を見て「まだなのに…」と怒ってしまいましたが、子供たちの中には「何かいいものができてる！」という思いでトマトを捉えている子供も多かったです。だからこそ、緑の小さなトマトがなった時も、宝物を集めるように手にとっていったのでしょう。教師と子供との価値観の違いに気付かされた栽培活動でした。

A児は、トマトであるということ自体は知っている様子でした。緑から赤に色が変わることは知らないようでしたが、トマトの色を一つ一つ見ながら、確認しているようにも見えました。家庭で毎日トマトを見ていたというA児。園で確認したトマトと同じように、いつ自分のトマトの色が変わっていくのかを楽しみにしていたのでしょう。

どのように“トマト”だと子供たちが知っていくのか、知らせるのか悩みながらの取組となりました。実ができた時に、「トマトだ」と言った子供の言葉をきっかけにクラスでトマトができていることや赤くなることを話したこともありましたが、ただ、まだまだ自分の思いや言葉を聞いてほしい3歳児では、周知するとまではいきませんでした。だからこそ、「赤くなるんだ、じゃあ待とう」と思う子、そう思ってもつい採ってしまう子…など、多様な子供たちの思いに触れることができたようにも思います。

栽培物との出会いや感じ方、関わり方などには、一人一人違いがあり、その中で生長の過程を見たり、手に取ったりしながら栽培物への親しみをもっていくのだと感じました。そのことを踏まえ、教師は自分の中の“当たり前”を立ち止まって見つめ直し、子供の見ている世界に触れることが大切なのだと気づきました。



まめ、むいてみよう

偶然から生まれた楽しさの中で

保育エピソード

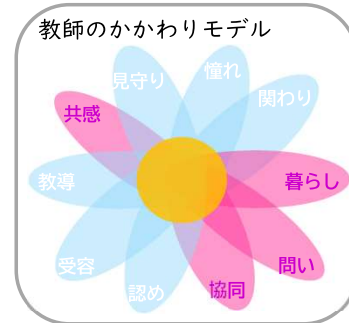
A児が、菜の花を花壇から抜いて「まめー！」と持ってきました。そこで、「ちょっとあけて見てみる？」と声をかけ、一緒に菜の花の実を剥いていくことにしました。開けると緑色の種が綺麗に並んでいます。傍で見ていたB児も、「たくさんある」と驚いた様子で呟きました。A児とB児は一緒に実を茎から取り剥いていきます。種を地面に落としていくので私が近くにあった皿を置くと、そこへ取った種をどんどん入れていき、黙々と剥き続けていました。

C児は興味が向かない様子で、私の傍で「ダンゴムシ探したい」と言います。そこへ、偶然他の友達が皿にダンゴムシを入れに来ました。「ダンゴムシ！」と目を輝かせるC児。私が「ダンゴムシさんって豆食べるのかな」と言うと、しばらく考えた後「あげてみる」と実を剥き始めました。「どうやってするの？」と聞くので剥き方を伝えると、さっそく剥いてダンゴムシのいる皿に乗せていきます。あげていくうちに、ひっくり返ったダンゴムシのお腹の上に種が乗りました。もぞもぞと動く様子をじっと見つめて、「食べる…!」と呟くC児。隣で実を剥いていたA児も気付いて一緒に覗き込み、「食べる」と頷きます。その言葉を聞くと、C児は「食べるなあ」と笑顔になり、どこか満足そうに次の実を剥いていきました。

考察

偶然、根っこから菜の花を抜いてしまったA児でしたが、そこから遊びが広がっていきました。剥いて種をだす、という一つの遊びをする中でも、どんどん種が出てくることが楽しくて行う子もいれば、C児のように何かにあげてみるために始める子もいて、その楽しみ方はそれぞれなのだと感じる出来事でした。

それまでC児とは関わらず豆を剥いていたA児は、C児の「食べる」という言葉に反応し、同じように「食べる」と言葉で返しています。友達と同じ場所で気持ちを共有し合いながら一緒に時間を過ごす空気感を、C児は心地よく感じていたのかもしれない。



未来につながる教師の学び

ひとつの遊びの中でも子供一人一人に様々な思いがあり、それぞれに楽しいと思う遊び方があるということを改めて感じました。

それぞれの思いやしたいことを受け入れたり、一緒にやってみたりする子供たち。一人一人が見つけた楽しさに共感しながら関わりたいと思いました。また、今回たまたま花が根っこから抜けたり、ダンゴムシが皿に入ったりしたように、遊びや生活の中で起こる様々な偶然を、子供と一緒に楽しむということも大切にしたいと思います。

このアリはかむねんで

生き物と向き合い揺れる気持ち



保育エピソード

テラスでA児とB児がアリを見つけ「おおきいアリがいる！」と大声で叫んでいます。「ほんまや！おおきいアリやね」と私も返事をしたとたん、A児がアリを踏んだのです。一瞬の出来事のあと、「このアリはかむねんで」とA児がポツリと言いました。するとB児が「かわいそうやんか」と、もぞもぞ動いているアリをカップに入れて花壇の土の上にそっとのせました。「なかまのぶんまでがんばってね」とアリに声をかけながらしゃがんで様子を見守るB児。後を追うようにA児が隣にやってきて、もがくそのアリを触りだしました。B児は「さわらないでね、ちょっとずついきのびてるから」と強い口調で言います。それでもその場から動こうとしないA児のことを「あかん」と遠くへ押しつけたのでした。その後もA児はしばらく黙ってアリを見つめていました。

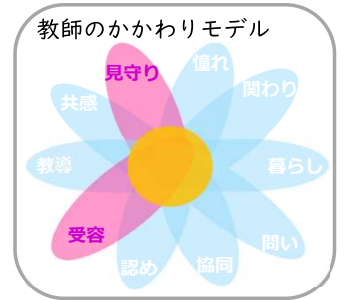
数日後、この前と同じ種類のアリが保育室を歩いています。発見した数人の子供たちが取り囲んでいると、A児が「フー！フー！」と一生懸命に息を吹きかけています。その行動は、アリがみんなを噛まないように遠ざけているように見てとれました。すると「せんせい、（つかんで）ダンゴムシのおうちにいれて」と言ったのです。アリをつかまえてケースに入れるとA児はその動きを目で追いながら眺めていました。



考察

A児の行為は“アリは噛む”ということを知っていて、身を守るためにとっさにした当たり前のことだったのでしょう。アリに心を寄せて関わるB児の様子を見たあとで、強く止められながらもアリを触ろうとしたのは、まだ生きていのかどうかを自分で確かめなかったのかもしれませんが、生きていことに安心したのか残念に思ったのかはわかりませんが、A児なりにアリの命に向き合っている瞬間であってほしいと願ひ、あえて見守りました。

後日のアリとの出会いでは、葛藤したのちにアリの生（生きていくこと）に触れたことで生かしておくという今までとは違う捉え方をしたのではないかと考えます。



未来につながる教師の学び

生き物をめぐっては、大事に扱ってほしいという願いをにじませた言葉をついかけかけたくなる私たちです。しかし、その子がそれまで体験したことや得た知識によって生き物の扱いや接し方は様々であることを改めて振り返ることができた出来事でした。その子ならではの捉え方を理解し、双方の思いや行動を受け止め、願ひをもって見守る教師の姿勢が大切だと気づかされました。

また、子供同士が関わりの中で相手の感情に気づき、心を揺らしながら、自分とは違う見方や感じ方に気づいていく過程も大切にしていきたいと思います。



カメを見ながら

保育エピソード

年長児が飼育している2匹のカメ。子供たちは、赤ちゃん・子供・お母さんと呼んでいるので「このカメ…お母さんなの？」と聞いてみました。すると、A児は「だって、赤ちゃん小さいやろ」B児は「大きいほうが力強いねん、だからお母さんと違う？」と話してくれました。私が「大きいからか」と言うと、子供たちは、そうだよねと言いたそうに顔を見合わせていました。その時、小さいカメの上に大きいカメが乗っていたので、「先生の子供な、先生より大きいねん、もしかして、大きいカメが子供で、おんぶして〜って言ってるのかも」と言うと「そんなことないやろ」と面白がっていました。カメに餌をあげると大きいカメばかり食べています。C児が「赤ちゃんにも残しておいて〜」とカメに向かって言っています。小さいカメが餌を食べはじめると「赤ちゃんが食べた！」と一安心したようでした。私は思わず「一人でちゃんと食べるし、赤ちゃんじゃないのかな？」と呟くと、C児は「そうかも」と、はっとしたように言いました。すかさず、D児が「私たちと同じ子供ってことやな」と言いました。私が「カメも二人みたいに友達だったりしてね」と言うと、C児とD児は「え！私たちみたいになってこと」と驚いて顔を見合わせ、嬉しそうにしていました。一緒に見ていた子供たちも面白くなったのか「このカメ、おじいちゃんと、おばあちゃんかも…」と、いろいろな家族構成について、自分たちの思いつきを言い合っていて楽しんでいました。

友達が側にいたからこそ



考察

子供たち一人一人の経験や思い、捉え方が違うので、私の発言は子供たちにとって思いもよらないことだったようですが、違うと否定するでもなく面白がっていました。

同じものを見ていてもそれぞれに思っていることが違うことがあります。そのことを言葉にし、会話を弾ませたり、やりとりしたりする中で、想像を膨らませ、考えを深めたりすることを子供たちは心地よく感じていたのではないのでしょうか。



未来に繋がる教師の学び

自由に思いを出し、話せる雰囲気だったので、見方が違うことも、同じということも素直に言い合えるよさがありました。教師が子供の言葉だけに引きずられることなく、内面を想像し子供と同じ目線で会話を楽しんでいくことが、子供自身の新たな気づきや、自然な問いかけになっているように思いました。概念的にとられることなく柔軟な思考で子供たちと向き合っていきたいと思いました。



自分で決めるということ

保育エピソード

個人栽培しているピーマン。収穫をするタイミングは自分で決めるように子供たちに伝えていました。

A児のピーマンは早い時期から実っており、3つほど大きくなっています。でも、A児は収穫しようとしていません。水やりはしていて、ピーマンの状態を見ているようだったので、「Aちゃんのピーマン、おいしそうやね」と言ったり、「いつとるの?」と聞いてみたりしましたが、何となく頷いている感じで、その反応もよくわかりませんでした。私は、苦手だから採りたくないのかなと思っており、もう少し様子を見ることにしました。

後日、好きな遊びの時間に、A児とB児と一緒にピーマンのプランターの前にいたので、何をしているのか気になり、近くに行きました。どういうやりとりをしていたかは分かりませんが、B児がA児に「ピーマン、採ったらいいやん」と言っていました。すると、A児が「うん」とにこやかに応えているので、私は思わず、「ええ～Aちゃんピーマンとるの?よかったね!」と言いました。この日は2つ収穫していました。

保育エピソードその後

その日の降園時、A児の保護者からA児はピーマンが好きだということを知りました。また、夏休み前にピーマンの栽培について、大学の先生からお聞きしたことを子供たちに知らせた後、A児が「ピーマンとる!」と私に言いに来て、収穫していました。



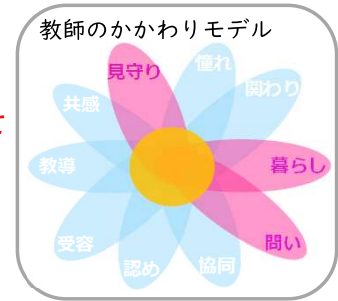
考察

A児はいつ採ろうかと思いを巡らせてはいても、自分で決めるということができずにしたのかもしれませんが。

自分で決めるという背景には、誰かの後押しや様々な情報にも影響されるものです。友達からの直接的な言葉が、A児にピッタリと響き、行動につながったようでした。B児の基準(感覚)を自分の中に取り入れることができたことを尊重したいと思います。

一人一鉢があるという環境と大学の先生との関わり(情報)が、友達のものと比較して感じたり、やり取りがうまれたりする豊かな関わりになっていたようです。

ピーマンの収穫に向き合って



未来につなぐ教師の働きかけ

なぜ収穫することにしたのかを教師がA児に問うという働きかけをすることで、A児自身が情報を整理し、思いや考えを自覚したり、アウトプット(表現)したりすることにつながるのではと振り返りました。

同じ言葉がけをしても、子供によっては、捉えやイメージが違うことを改めて実感しました。子供たち一人一人の捉え方、感じ方の様々に関わりの中で、丁寧に読みとっていくことが必要だと感じました。



入ってほしくないから…

保育エピソード

A児ら3人が中型積み木で囲い、ござを敷いてお家ごっこをしており、隣にはB児らのお家がありました。B児が3人のお家に上靴を脱いで入ろうとした時、色画用紙の端紙に養生テープを粘着面を表にして貼ってあるものに、靴下で踏んでしまいました。「何これ〜？」とB児が笑いながら紙を靴下から外し、手にすると、C児が「お家に入ってきたときにびっくりするもの作ってるの！」と傍にいた私にも言っているかのようにB児に言いました。私はこれって害虫駆除と同じで、入ってほしくないからなの？と感じたので、C児に「この仕掛けは誰が考えたん？」と聞くと、「・・・Aちゃん」と答えます。紙の裏を見ると、おばけの絵や×印が描かれていました。それを見たB児は「これだったらお楽しみで入りたくなるかもよ」と言い、私に問い詰められるかも？というような雰囲気が一瞬、変わったのです。C児もD児も紙に絵を描き、養生テープを貼るということを楽しんでいる様子でした。

以前、A児が『A児とD児のいえ はいらないで』というような張り紙をしていた時、なぜ入ってほしくないのかとか、違う書き方はできないかというような話をしたのを思い出しました。私が、A児に「何でこの仕掛けを作ってるの？」と聞くと、「おばけの家に入ってほしくないから」という答えが返ってきました。

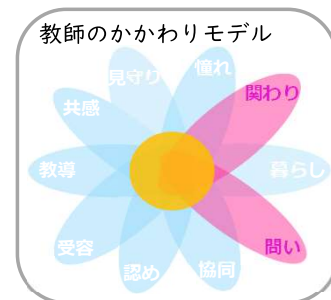
考察

A児とD児はおばけの衣装を作り、ハロウィンごっこをしていることが、この日もつながっていて、自分たちの基地として囲いたい気持ちと、自分たちの基地がここにあるということをアピールしつつ、入ろうとした人が嫌な思いをしないようにと、考えていたのだろうか、思いを巡らせる場面でした。

また、同じ場にいた、C児やD児の思いはどうだったのでしょうか？していることを共有していても、思いの違いが多少なりともあったのではないかとも思います。一緒に遊んでいる友達と互いの思いを感じようとすることは、多様な視点で物事や他者と向き合うことにつながるのだと思います。

さらに、B児の解釈がA児の意図したことではなかったかもしれませんが、友達の見方に触れたことで、A児自身のしていることの意味づけが肯定的に変わったのではないかと思います。

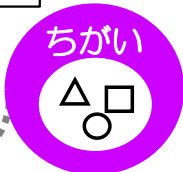
自分たちの基地として囲いたい気持ちと
気にかけてほしい気持ちの表れ



未来につなぐ教師の働きかけ

幼児が自分たちで遊び場所を作り、基地としている時に、「〇〇と〇〇のいえ」というような名前の表記や「はいらないで」というようなメッセージが書かれていることがよくあります。文字への関心の持ち方や友達との関わり方など、その時々で状況は違いますが、つい、読み手の立場で社会や他者を遮断しているのでは？という見方をしていたことに気付かされました。

自分の思いを文字を書くことで表現している姿を受け止めながら、言葉で伝えることで得る様々な感情を人と関わる力につながるような働きかけをしていきたいです。



2本目の大根収穫

保育エピソード

畑に残っている大根の収穫について子供たちに相談しました。「年少さんにあげる？」等の声があがりましたが、それだけの数がないことも分かり、自分たちで持ち帰ることになりました。収穫した大根は、子供たちが大中小の大きさに分け一列に並べました。子供たちの話から『大きい』と言う声が聞こえてきたので、「みんな大きい大根がいいの？」と聞きました。すると「大きいのがいい！」「私は小さいの」等、自分の欲しい大きさを言い合います。くじ引きで大根を決めるという話もでしたが、まずは、欲しい大根の大きさ（大中小）で3つのグループに分かれました。みんなで大根を取り囲み、大きさ比べをしましたが、特別大きさが違うもの以外は色々な大きさが混ざって並んでいました。私が、ちょうど真ん中に並べてあった大根を子供たちに見せ大きさを聞いてみると、「これは大きい大根やろ」「中くらい」など自分の見方を言い出し、みんなで大きさを決めるのは難しくなりました。次に、自分の欲しい大根がある場所に行くことになりました。すると、さっきは大きい大根が欲しいと言っていた子供が、中くらいの場所の中から大根から選ぶとする等、様子が変わってきました。結局、くじ引きで、大根をもらう順番を決めることになりました。遅い順番になると、欲しい大根がもらえないと反対もありましたが、みんなが分かるやり方にしようとして決着しました。1番の子供から大根を選び始めると、大きさ以外にも、股根の大根を選んだり、大根が苦手だから小さいものにしたりと等、選び方も様々でした。また、自分の前後の友達がどんな大根を選ぶのか興味深く見ていました。最後のくじを引いたA児は「大きい大根ないかも…」と残念そうに呟いていたのですが、見に行くと「大きい大根まだいっぱいある」と嬉しそうに教えてくれました。

友達と一緒に決めるということ



考察

2本目の大根だったこと、1本目を収穫して、数日後だったこともあり、自分より他の誰かにあげたいと思いを巡らせているようでした。自分たちが大根を持ち帰ることになると、自分が欲しい大根がもらえるように、懸命に自己主張したり、言い合ったりしていました。みんなで大根を分けるという目的があったので、紆余曲折し思うように進まない話し合いでしたが、かえって自分事として考え、みんなで決めようという空間になっていたように思います。また、友達とどのようにするのか決めながら、自分の状況（気持ち）を整理したり、友達の視点を通して様々な見方を知ったり、考えを受け入れたりしながら、新たな気づきが生まれているように思いました。



未来につながる教師の学び

年長児みんなで決めるという状況が、自分の考えや見方とは違ってどこかで同調し互いの思いを尊重し受け入れ合う状況を作っていくのだと思いました。だからこそ、教師の問いかけは、子供の見方を広げていけるように投げかけていきたいと思いました。また、一人一人様々な思いがあり、同じものを見ていても多様な捉えがあるということも、子供たちと共に確かめたり、互いの話を聴き合ったりしながら、子供自身が自分事として問い直せる余地を残しながら進めていかなければならぬと、改めて振り返りました。みんなで決めることは大変なこともありますが、話し合いそのものに面白さを感じ、みんなで対話していける温かな土壌を丁寧につくっていきたいと思いました。



- ◇ このままでもいいんじゃない (4歳)
- ◇ 砂場のプールづくり (4歳)
- ◇ 子供たちのオニごっこ (5歳)

友達と一緒にたのしかったり

遊びたいけど遊べなかったり

力を合わせたり

意気投合したり

1人より2人って感じたり

みんなのステキを感じたり

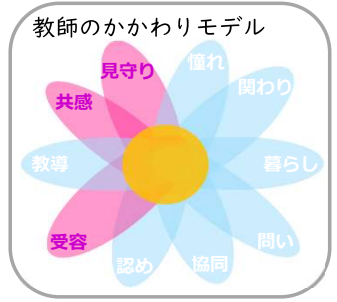
～幼児期の子ども達は遊びを通してしだいに友達関係が広がっていき、それに伴って学びも深まっていきます。

思うようにいかないことがあっても、一緒にいたいと願い、やがてクラスや幼稚園という集団の中の自分が感じられるように～



このままでもいいんじゃない

友達や先生に肯定的に受け止めてもらい、知っていくわたし



保育エピソード



考察

晴れの日が続き、水を大胆に流したり、裸足になってその中を歩いて遊ぶ子供が増えてきました。砂場の真ん中では大きな水たまりができています。教師が隅で掘っているのに気付いたA児が「そっちとつなげようか？」と言い、横で聞いていたB児もうれしそうに「つなげよっか～」と言うので、私も「そうしょっかー」と一緒になって掘り出しました。やがて、掘り進めた先がテントのウエイトにぶつかります。A児が「こっちに…」C児は「こっちに…」とそれぞれ違う方向を指さし、私はどちらの考えにも「いいね」と応えていました。すると、2人の話を聞いていたB児が「このままでいいんじゃない」と言い、私は思わず「あ、このまま？」と聞き返しました。するとB児は頷き、「行き止まりってことでいいんじゃない」と言い、私は「あ、それもいいね」と応えました。A児は「いや、こっち」、C児も「こっち、こっち」と再び言いましたが、やがて水が引いてきたこともあり、A児は元のところを掘りC児は少し手前から自分の言っていた方に始め、B児の言った通りそこは行き止まりのままになりました。B児はA児が掘っているところに行き、またにこにこしながら掘っていました。

A児もC児もそれぞれの思いを言葉にする中でB児はどうしたかったんだろうと後になって思いました。その後の様子からもB児は2人の異なる考えを聞き一つに決めることよりも、今の楽しさを十分に味わいたかったのではと思いました。B児の「このままでいいんじゃない」という言葉は、2人の思いをどちらも否定せず、結果的に間を取り持つ「保留」を提案したことになりました。そのことが2人にとっては自分同様に、友達にも思いがあるということが落ち着いて感じられたのではないかと思います。

未来につながる教師の学び

子供と共に遊びを楽しむ中で、教師の意図性からつい考えることを促しがちだとはっとさせられました。すぐに決めたい気持ちを抱えながらあえて決めず、状況を見つめなおしたり考えなおしたりしながら生活していくことも、これから生きていくための大事な力ではないかと考えさせられました。教師に自分の思いを受け止めてもらい気持ちが満たされていくことで、子供たちは自分のよさや可能性を認識していき、やがて友達の思いを受け止めたり、考えたりしながら、協同して生活していくことにつながると思います。

砂場のプールづくり

ともだち



保育エピソード

暑さが続き保育室で遊んでいたA児、B児、C児が珍しく砂場にあります。スコップを持って砂を掘る3人の姿は、ままごと遊びをする様子とはまた違うたくましさを感じる一面だったので私も思わず声を掛けたくなりました。「ここで遊んでいるの？一緒にしたいな」とたずねると、「うん、プールつくってるの。ねー」とB児が2人の顔を見つめます。「先生だったらおぼれるよ」とC児。「赤ちゃんでもおぼれるよ」とB児も同調し笑いを誘います。「溺れたらどうしよう」と私がちょっぴり困ったように返事をする様子をA児はにこにこしながら聞いています。少し離れた場所を黙々と掘っていたA児でしたが、「(穴を)つなげようよ」と言うC児の一声にとっても嬉しそうに応じていました。バケツで水を運び入れるとプールが完成したようでした。引き続き黙々と水汲みを繰り返したのはA児で、「いっぱいお水を運んだね」と声をかけるとはにかむように首をすくめてにっこりとうなずきました。大きさも水量もこじんまりしたみんなのプールでしたが、作れたことに満足な様子でした。「こっちはふかいよ」「つめたいね」などと言いながらバシャバシャと水音を立てて歩き回るなどして楽しみました。

友達の存在がもたらした安心感



考察

A児は普段は関わりの少ないB児、C児とこの日は遊び始めから同じ場にいました。プールを作るために黙々と動いていたように見えますが、周りが発する言葉や動きを逃さないように受け止めながら素直に反応しています。A児なりに一緒に楽しい、嬉しいと感じていたようです。その雰囲気を感じとるようにB児とC児は安心感をもって思いを出していき、砂場はいろいろな子供たちが集まり思いを出し合える包容力のある遊びの場となっていったのではないかと考えます。遊んでいくにつれ、プールを作るということを目指してみんなの張り切り具合が高まり、思いがつながっていく面白さを味わっていったように思います。

教師のかかわりモデル



未来につながる教師の学び

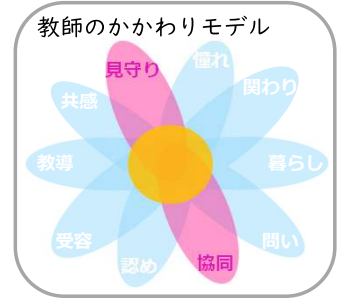
いつもと違う姿に面白さを感じて遊びに加わりたかった私の願いを、子供たちは各々に受け止めたようです。一緒に遊んでやりとりをし、くまなく声を掛けていくと、自分が受け入れられていることを感じ、相手への包容力が生まれていくことがわかりました。

思いや取り組みは異なるけれど、それぞれが安心して遊び、居心地の良さを感じながら生き生きと思いを出し合える場(環境)となるように共に楽しむ姿勢をこれからも心がけたいと思います。



子供たちのオニごっこ

みんなで遊ぶことの中に点在している意欲と主張



保育エピソード

14人の子供たちがバナナオニをしており、そのうち、3人がオニになっていました。しばらくすると、「オニ交代しよう」という声上がり、子供たちが集まってきました。オニになりたいという子が9人いて、カラー帽子を白色に替えています。遊び初めのオニ決めは、『オニきめオニきめオニじゃないよ…』と子供たちが円状に片足ずつ出して、残った子がオニになるといういつもの決め方でした。「今度はオニが多すぎる！」と言っている子がいますが、オニになった子供たちが「1、2、3、4、ゴリラのしっぽ…」と数え始めると同時に、逃げる子供たちがあちこちに走っていきました。バナナになった子の前で、助けが来ないようにオニの子が見張っていると、「みまもりなし！」と言いながら走り去っていく子もいます。オニの子がバナナになった子を1か所に集まるように誘導し始め、逃げていた子から「そんなんずるいで！」と言われても構わずにオニごっこは続きます。途中で「入れて」と仲間入りし、バナナになっている子を助けていたり、近くにいるバナナになっている子に「やめるわ」と伝え、違う場に行く子もいます。私は、これでいいのか？と思うところがありましたが、機敏に走り回っている子供たちの様子を見てみると、動きを止めて話をするのはおもしろさがなくなるように感じたので、終始様子を見守っていることにしました。そのうち、「一回、お茶のみに行こう」という声上がり、ほぼ一斉に保育室に戻っていきました。



考察

2学期の始め頃まで「先生も一緒にして」とオニごっこに教師も仲間の一員として求めていた子供たちでしたが、今は自分たちだけで、そして、みんなで遊びたいという思いや行動力が強くなっています。友達に声をかけて誘い合い、園庭のベンチに集合することを楽しみにしている姿に、友達と群れて遊ぶことを求めているように感じます。

オニの立場、逃げる立場、双方が勝つことに突き進んでいることに子供たちのエネルギーを感じますが、見方を変えれば、自分都合のやり方を生み出しているとも言えます。

未来につながる教師の学び

それぞれの子が言いたいことを主張していますが、自分たちで聴き合う状況を作ったり、ルールを共有していったりすることに必要性を感じられるような教師の働きかけを模索していきたいです。

誰かの一言で状況が変わることを教師が危うさと捉えるか、しなやかさと捉えるかで、子供たちへのまなざしも変わってくるように思いました。



思う存分遊んだり

身体の感覚を獲得していったり

清潔に気持ちよく暮らしたり

けがや病気から身を守ったり

食べ物について考えたり

食べるって有難いなって感じたり

～幼児期の子ども達は身体をめいっぱい使い充実感を味わったり、自ら

すすんで行うことに喜びを感じたりします。

様々な環境との関わりの中で自分と向き合い、からだや

生きることに対する多様な見方や捉え方ができるように～